

令和 6 年 5 月 7 日現在

機関番号：35409

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02618

研究課題名(和文)「国際平和文化創造力」を育成する「多文化間イシュー学習」の日米協働開発

研究課題名(英文) The Development of "Multi-Cultural Issues Study" to Advance "the International Peace Culture Creativity" through the Japan-US Collaborative Action Research

研究代表者

小原 友行 (KOBARA, TOMOYUKI)

福山大学・人間文化学部・教授

研究者番号：80127927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)： グローバル時代の中で生まれている対立や葛藤・ジレンマを克服するために必要な新たな価値の創造を担う人材に求められる「国際平和文化創造力」を育成するための、「多文化間イシュー学習」の授業モデルを、日米間での協働的アクションリサーチを通して開発することを目的とした本研究の成果は、大きく次の3点である。

第1に、「多文化間イシュー学習」に関する理論仮説を構築できたことである。第2に、理論仮説に基づいて、「葛藤・ジレンマ型」「希望創造型」「摩擦・対立型」の授業モデルを開発できたことである。第3に、理論仮説および授業モデルの有効性を、小・中学校での研究授業を通して実証することができたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は、次の3点である。第1は、「国際平和文化創造力」を育成する新たな「多文化間イシュー学習論」を提案していることである。第2は、学習論に基づく授業モデルを、日米間の人的ネットワークを活用した「協働的アクションリサーチ」という研究方法を取り入れて開発していることである。第3は、「国際平和文化創造力」を備えたグローバル教員養成の課題にも応える研究となっていることである。

研究成果の概要(英文)： This research aims to develop the learning design plans that reflect multi-cultural issues. These are considered effective in fostering "the international peace culture creativity," one of the qualities and abilities required in the rapidly evolving global era. The method, known as "collaborative action research," was carried out between Japan and the USA. The result obtained in this research is the following three points.

First, we were able to construct a theoretical hypothesis regarding "multi-cultural issue study." Secondly, based on the theoretical hypothesis, we were able to develop the multi-cultural learning issues design plans of the following three types; "conflict/dilemma type", "hope creation type", and "friction/confrontation type." Third, we were able to demonstrate the effectiveness of the theoretical hypothesis and design plans through the research classes at elementary and junior high schools.

研究分野：社会科学

キーワード：国際平和文化創造力 多文化間イシュー学習 授業モデル デザイン思考 NIE(教育に新聞を)

1. 研究開始当初の背景

「国際平和文化創造力」とは、平和な国際社会を実現しようとする意欲や意識をベースに、その実現に向かって7つの「C」であるキュリオシティ（好奇心）、コミュニケーション（対話）、コラボレーション（協働）、クリティカルシンキング（批判的思考）、クリエイション（創造）、チャレンジ（挑戦）、チョイス（選択）を行うことができる資質・能力と定義することができる。それは、急速に社会のグローバル化が進展していく中での文化間での格差が広がり、摩擦や対立が深刻になっている今という時代において、憎しみや悲しみの連鎖を断ち切り、それを乗り越える勇気や寛容性を持つためにも必要不可欠なものである。また、「一方が正義で他方が悪」「どちらかが勝者でどちらかが敗者」とするのではなく、多様な正義を認めどちらかが勝者となれるような世界の実現が求められている今日、10年後、20年後という近未来の学校教育を考えると、このような「国際平和文化創造力」を備えた児童・生徒および教師の育成は、最重要な今日的課題の一つであると考えることができる。このような課題意識から、研究代表者は、これまでにアメリカ合衆国ノースカロライナ州グリーンビル市にあるイーストカロライナ大学のスタッフの協力を得て、日米両国の教員・学生・児童・生徒の相互理解と協力を促進することを目的とした「広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター」を創設するとともに、そのような資質・能力を備えた教員を養成するためのプログラムとして「体験型海外教育実地研究」を開発・実施してきた。引率指導した大学院生は、これまでに108名を数える。

また、2018～2021年度の間、日本学術振興会 JSPS 科研費：基盤研究(C)（一般）の研究助成を受けて(21K02618)「『グローバル・パートナーシップ』を育成する多文化間イシュー教材の日米協働開発」に取り組んできた。

本研究では、このような日米間で構築された強い人的ネットワークを活用するとともに、先行研究の多文化間イシュー教材の開発を通して構築してきた、対話型の「協働的アクションリサーチ」という教育実践研究の手法を用いて、日米共通の「多文化間イシュー学習」(摩擦・対立・葛藤が生まれる論争問題とその克服を目指した問題解決プロジェクトの学習)の開発を目指すものである。

2. 研究の目的

本研究は、グローバル時代の中で生まれている対立や葛藤・ジレンマを克服するために必要な新たな価値の創造を担う人材に求められる、「国際平和文化創造力」を育成するための「多文化間イシュー学習」の授業モデルを、日米間で構築された強い人的ネットワークを活用しながら、対話型の「協働的アクションリサーチ」という手法を通して開発することを目的とする。具体的には、次の3点を明らかにする。

対立や葛藤・ジレンマを克服するための「多文化間イシュー学習」に関する理論仮説を、日米協働で構築する。

構築した理論仮説に基づいて、「多文化間イシュー学習」として有効と考えられる単元レベルの授業モデルを、日米協働で開発する。

開発した授業モデルを、小・中学校において研究授業として実施し、その結果の分析・評価を通して理論仮説および授業モデルの有効性を実証する。

3. 研究の方法

(1) 本研究の手順・方法

本研究では、具体的には、次のような手順・方法によって、研究をすすめていった。

「国際平和文化創造力」を育成するアクティブ・ラーニング型の「多文化間イシュー学習」の理論仮説を、日米間の協働的な対話を通して構築する。

構築した理論仮説に基づき、授業開発のためのフレームワークを日米協働で作成する。

フレームワークに基づき、教材の調査・研究を協働で行い、日米の小・中学校共通の学習ともなる、次の3種類の「多文化間イシュー学習」の授業モデルを開発する。

葛藤・ジレンマ型学習（複数ある解決策のどれを選んでも不利益があり、選択・決断が困難な問題に挑戦しようとしている（した）問題解決の「ストーリー」を取り上げた学習

希望創造型学習（新たな価値の発見や再構築によって未来への希望を生み出そうとしている（した）問題解決の「ストーリー」を取り上げた学習

摩擦・対立型学習（文化間での意見や考えが摩擦・対立している課題を克服しようとしている（した）問題解決の「ストーリー」を取り上げた学習

開発した授業モデルを用いて、小・中学校で研究授業を実施する。

教材開発のためのワークショップを7月に日本で、その有効性を検討するための評議会を9～10月に米国で行うとともに、日米共通の単元として完成させる。

研究成果をウェブページおよび学会発表・論文等で情報発信し、その普及を図る。

最終年度には、研究成果をまとめた報告書を完成させる。

（2）各年次の研究

1）第1年次（2021年度）の研究

第1年次（2021年度）には、大きく次の5点の研究を行った。

第1に、「国際平和文化創造力」を育成するアクティブ・ラーニング型の新たな「多文化間イシュー学習」に関する理論仮説とそれに基づく授業開発のためのフレームワークを構築した。第2に、構築した理論仮説に基づいて、「国際平和文化創造力」を育成するための学習として有効と考えられる、3種類の「多文化間イシュー学習」（「葛藤・ジレンマ型」「希望創造型」「摩擦・対立型」）のうち、最初の「葛藤・ジレンマ型学習」の授業モデルとして、単元「アンネ・フランクが残した言葉を追いかけて」を開発した。第3に、開発した授業モデルを用いた研究授業を、2021年11月29日に広島大学附属三原中学校第1学年の生徒に対して、また2021年12月6日に広島大学附属三原小学校第6学年の児童に対して実施し、その結果の吟味に基づいて、歴史上の人物について時空を超えて取材し、その成果を「はがき新聞」の形式で表現するという、「デザイン思考」を取り入れたアクティブ・ラーニング型授業デザインの有効性を検討するとともに、授業計画の修正・改善を図った。第4に、2021年度の研究成果をまとめ、2021年12月5日に立命館大学においてオンラインで開催された日本NIE学会第18回大会自由研究発表第3分科会において、「『国際平和文化創造力』を育成するNIE学習の構想～単元『アンネ・フランクが残した言葉を追いかけて』の開発を通して～」というテーマで発表を行い、理論仮説および授業デザインの吟味に基づく再修正を図った。そして第5に、研究発表の成果を同タイトルの論文にまとめ、福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第8号に掲載した。

2）第2年次（2022年度）の研究

第2年次（2022年度）には、大きく次の5点の研究を行った。

第1に、2021年度に構築した「国際平和文化創造力」を育成する「多文化間イシュー学習」に関する理論仮説および授業開発のためのフレームワークに基づき、「希望創造型学習」と「葛藤・ジレンマ型学習」の教材調査を行った。第2に、教材調査に基づき、東日本大震災地域の学校における未来創造に向けた復興のストーリー（物語）を教材として取り上げた「希望創造型学習」の授業モデルを開発した。具体的には、「女川中学生の千年後の命を守る活動を追いかけて」「石碑から学ぶ防災・減災・応災文化の発信」「戦災・震災地域復興のキーワードを求めて」の3つである。第3に、開発した3つの授業モデルのうち2つについて、研究授業を実施し、授業モデルの有効性を吟味した。一つは、2022年11月24日に広島大学附属三原中学校の第7学年の2クラスで、二つ目は、2022年12月2日に広島市立川内小学校の第5学年の1クラスで実施した。第4に、研究授業の結果の吟味に基づいて、「デザイン思考」を取り入れたアクティブ・ラーニング型授業デザインの有効性を検討するとともに、授業計画の修正・改善を図ったうえで、全国社会科教育学会第71回全国研究大会自由研究発表第1分科会、2022年度日本教材学会中国四国九州支部研究発表大会自由研究発表、日本NIE学会第19回大会自由研究発表、以上の3つの学会において研究発表を行った。

そして第5に、2022年度の研究成果を、「『デザイン思考』に基づく『未来文化創造学習』の授業開発～東日本大震災地域の教材を事例に～」というタイトルの論文にまとめ、福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第9号に掲載した。

3) 第3年次(2023年度)の研究

第3年次(2023年度)は、大きく次の6点の研究を行った。

第1に、2021年度に構築した「国際平和文化創造力」を育成する「多文化間イシュー学習」に関する理論仮説および授業開発のためのフレームワークに基づき、「摩擦・対立型学習」の教材調査を、日本国内(那覇市の歴史博物館、横浜市の海外移住資料館)と米国(ハワイ州コナ市・ホノルル市、カリフォルニア州ロサンゼルス市・インディペンデンス市)において行った。第2に、教材調査に基づき、米国における日系移民の希望のストーリー(物語)を教材として取り上げた授業モデルを開発した。具体的には、単元「米国における日系移民の物語を追いかけて～心の中に平和のとりでを築くために～」である。第3に、開発した授業計画を用いた研究授業を、広島市立川内小学校の第6学年の1クラスで2023年11月20日に実施した。第4に、2023年7月10日～12日に米国からの4名の協働研究者を招聘して、「『国際平和文化創造学習』の日米協働開発の評価と展望」をテーマとした日米協働フォーラムを開催し、3年間の研究の評価を行った。第5に、2023年度の研究成果を、日本教材学会第35回研究発表大会自由研究発表第3分科会(2023年10月21日)において「『国際平和文化創造力』を育成する多文化間イシュー教材開発の新視点」というテーマで発表するとともに、日本NIE学会第20回福岡大会自由研究発表第1分科会(2023年12月2日)においても「『デザイン思考』に基づくNIE学習の開発-単元『米国における日系移民の物語を追いかけて』-」というテーマで発表を行い、理論仮説および教材の吟味に基づく再修正を図った。また、それらを基に研究論文「国際平和文化創造力」を育成するNIE学習の開発～単元「米国における日系移民の物語を追いかけて」～」を福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第10号に掲載した。そして第6に、3年間の研究成果をまとめた研究成果報告書を完成させ、2024年3月1日に刊行した。

4. 研究成果

本研究の3年間の成果としては、次の4点を指摘することができる。

第1は、いまだ未成熟ではあるが、「デザイン思考」の考え方を取り入れながら、「国際平和文化創造力」を育成する「多文化間イシュー学習」の授業開発の理論仮説を提案することができたことである。第2は、構築した理論仮説に基づいて、広島県内の小学校高学年～中学校段階を想定した3つのタイプ(「葛藤・ジレンマ型」「希望創造型」「摩擦・対立型」)のストーリー(物語)性のある授業モデルを、研究授業を通して開発することができたことである。第3は、ストーリー(物語)性のある自作の新聞や実地の教材調査に基づく自作スライドによる教材の紹介【旅人になる】、歴史新聞記者としての背景の読解(分析・解釈)【ジャーナリストになる】、「ストーリー」(物語)としての情報の編集【編集者になる】、そして「はがき新聞」の作成と交流【アーティストになる】という4段階の学習過程と学習活動は、児童・生徒にとって有効であったことを実証できたことである。そして第4は、作成された「はがき新聞」の内容分析から解釈すれば、見出し・イラストの表現や意見・考えの内容を見る範囲内ではあるが、各年度に開発したストーリー(物語)性のある教材に込めた「国際平和文化創造力」の育成の重要性に関するメッセージは、児童・生徒にも十分に受けとめられたと判断できたことである。

残された今後の課題としては、次の3点を指摘しておきたい。

第1の課題は、研究期間の大半(特に2021・2022年度)がコロナ禍の影響で、渡米しての研究授業の実施や、米国側の研究協力者を招聘した研究授業の分析・評価のための評価会議の開催が全くできなかったことである。結果として、日米協働開発研究としては不十分なものとなった。しかし、幸いにして、2023年度には日米間の往来が緩和されたので、米国からの協働研究者の招聘によるフォーラムや評価会議の開催を行うことができた。また、筆者自身が渡米して、ハワイ州およびカリフォルニア州で教材調査を行うことができた。しか

し、米国での研究授業は実施できなかった。第2の課題は、開発した授業モデルは各年度1～3にとどまったことである。また、研究授業の実施校についてもコロナ禍のなかで格別の配慮で許可された1～2校にとどまった。さらに、開発した授業モデルそれ自体が、現時点では大きな学習の展開を示すものにとどまり、詳細な学習指導細案にまでは至っていない。その意味では、理論仮説の有効性を吟味するデータとしては、必ずしも十分なものとはいえない。第3の課題は、本研究で用いた日米間の協働研究チームによる「協働的アクションリサーチ」(教育実践研究)という手法の難しさである。筆者自身がおよそ30年間にわたる日米間の国際交流の実績の中で培われたグローバル・パートナーとしての人的ネットワークが母体となって、「多文化間イシュー学習」という研究テーマでのチームづくりが可能であったと考えることができる。しかし、コロナ禍という大きな壁を突き破ることは容易ではなかった。その意味では、実質的な人的な国際交流がストップした中でも協働開発が可能となる研究的なフレンドシップやパートナーシップをいかに構築し続けていくのが、ポストコロナ時代の協働研究の今後の大きな課題と残されていると考えられる。

なお、以上のような研究の最終的なまとめとして、下記のような目次の研究成果報告書の作成を行った。

研究の概要

- 1 研究題目
- 2 研究経費
- 3 研究組織
- 4 研究の目的と方法
- 5 研究の経過

「国際平和文化創造力」を育成する「多文化間イシュー学習」の理論仮説

- 1 目標としての「国際平和文化創造力」
- 2 「多文化間イシュー」を取り上げた「ストーリー性」(物語性)のある教材
- 3 「デザイン思考」を取り入れた学習過程

第1年次の授業開発(2021年度)

- 1 「葛藤・ジレンマ型学習」としての本授業の概要
- 2 授業プラン～単元「アンネ・フランクが残した言葉を追いかけて」～
- 3 作成された「はがき新聞」の考察
- 4 本授業開発の成果と課題

第2年次の授業開発(2022年度)

- 1 「希望創造型学習」としての本授業の概要
- 2 授業プラン(1)～単元「女川中学生の記録に残す活動を追いかけて」～
- 3 授業プラン(2)～単元「石碑から学ぶ防災・減災・応災文化の発信」～
- 4 授業プラン(3)～単元「戦災・震災地域復興のキーワードを求めて」～
- 5 開発した授業プランの考察
- 6 本授業開発の成果と課題

第3年次の授業開発(2023年度)

- 1 「摩擦・対立型学習」としての本授業の概要
- 2 授業プラン～単元「米国における日系移民の物語を追いかけて」～
- 3 開発した授業プランの考察
- 4 本授業開発の成果と課題

「国際平和文化創造学習」の日米協働開発の評価と展望

- 1 日米協働フォーラムの開催
- 2 日米協働フォーラムの内容
- 3 日米協働フォーラムの評価会議

本研究の成果と課題

- 1 本研究の成果
- 2 今後の課題

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小原友行	4. 巻 第10号
2. 論文標題 「国際平和文化創造力」を育成するNIE学習の開発～単元「米国における日系移民の物語を追いかけて」～	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 福山大学大学教育センター『大学教育論叢』	6. 最初と最後の頁 5-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小原友行	4. 巻 第9号
2. 論文標題 「デザイン思考」に基づく「未来文化創造学習」の授業開発～東日本大震災地域の教材を事例に～	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福山大学大学教育センター『大学教育論叢』	6. 最初と最後の頁 5-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小原友行	4. 巻 第8号
2. 論文標題 「国際平和文化創造力」を育成するNIE学習の構想～単元「アンネ・フランクが残した言葉を追いかけて」の開発を通して～	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福山大学大学教育センター『大学教育論叢』	6. 最初と最後の頁 99 - 112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 「国際平和文化創造力」を育成する多文化間イシュー教材開発の新視点
3. 学会等名 日本教材学会第35回研究発表大会、自由研究発表（オンライン開催）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 「デザイン思考」に基づくNIE学習の開発～単元「米国における日系移民の物語を追いかけて」～
3. 学会等名 日本NIE学会第20回福岡大会、自由研究発表
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 「国際平和文化創造力」を育成する社会科授業デザイン～単元「戦災・震災地域復興のキーワードを求めて」の開発～
3. 学会等名 全国社会科教育学会第71回全国研究大会，自由研究発表第1分科会（オンデマンド開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 石碑を活用した防災学習の教材開発
3. 学会等名 2022年度日本教材学会中国四国九州支部研究発表大会、自由研究発表（Zoom開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 「国際平和文化創造力」を育成するNIE学習の授業デザイン～単元「女川中学生の千年後の命を守る活動を追いかけて」の開発～
3. 学会等名 日本NIE学会第19回大会、自由研究発表（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 「国際平和文化創造力」を育成するNIE学習の構想 ~単元「アンネ・フランクが残した言葉を追いかけて」の開発を通して~
3. 学会等名 日本NIE学会第18回大会、自由研究発表（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小原友行	4. 発行年 2024年
2. 出版社 福山大学人間文化学部	5. 総ページ数 245
3. 書名 「国際平和文化創造力」を育成する「多文化間イシュー学習」の日米協働開発	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ウォーレン サンドラ (Warren Sandra)	イーストカロライナ大学・教育学部・教授	
研究協力者	タッカー ジョン (Tucker John)	イーストカロライナ大学・歴史学科・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日米協働フォーラム：「国際平和文化創造力」の日米協働開発の評価と展望	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	イーストカロライナ大学			